

積極的にコミュニケーションを図る子どもを育てる指導の工夫
～地球上の人々と共に生きる担い手を育む国際理解教育～

大阪市立遠里小野小学校 学力部

1. 研究主題設定の理由

本校は素直で真面目な児童が多く、小規模校であることを活かし、クラスや学年の垣根を越えていろいろな交流活動を行っている。また高学年と低学年がいろいろな遊びや遠足・運動会などの行事に共に活動するなど、たてわり活動を積極的に行っている。

しかし、その中で自分の思いを相手にうまく伝えられなかったりするなど、あいさつや言葉でのやりとりが苦手な児童がおり、コミュニケーション力をつける必要があると感じられた。そこで、平成25年度より4年にわたって児童のコミュニケーション力を伸ばすために、国際理解教育（外国語活動）の研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

互いの違いを認め合い、豊かな人間関係を築くためには、互いの思いをきちんと伝え合うことが必要だと感じられた。思いを伝えるには、様々な表現方法を用いて、相手を理解しようとする豊かなコミュニケーション能力が大切であると考えた。そこで、「人とのつながりを大切にし、積極的にコミュニケーションを図る子どもを育てる」を研究主題とした。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点①外国語を通して、コミュニケーションの基礎作りを行うための指導の工夫

- 外国語に慣れ親しむ活動の工夫
- コミュニケーション活動の工夫

視点② 効果的な外国語活動を行う手立ての工夫

- 各学年の年間指導計画の作成
- 各教科との関連を考えた指導の工夫
- 教材・教具の作成と整備、環境整備（ワールドルームの設置）

視点③ 異文化を知り、違いを認め、尊重することの大切さに気づくための工夫

- 異文化を知る活動の工夫
- 異文化を体験するための工夫

4. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

- C－N E Tと打ち合わせする時間を確保して、担任とC－N E Tが連携して、系統的に一つ一つの単元に取り組むことができた。また、できるだけ発声する機会を多く持ち、英語の音やリズムに数多く触れることができるよう、歌やチャンツを取り入れたり、英語を使ったゲームを行ったので、児童は外国語により慣れ親しむことができた。
- 全校朝会で毎週、C－N E Tによる「ワンポイント英語」を紹介し、全校で英語を発声練習する機会を設けた。そのフレーズを教室掲示し、クラスルームイングリッシュに

取り入れたので、児童は教室で覚えたフレーズを自主的に話して、いろいろな英単語に触れることができた。

- コミュニケーションを図る活動を授業の中に積極的に取り入れ、言葉だけではなく、周りの状況やジェスチャーから意味を推測したり、顔の表情やジェスチャー、声の大きさなどの工夫によって、相手に自分の思いを伝えることの大切さに気づくよう指導することができた。
- 授業の後に振り返りカードを書き、楽しくコミュニケーションが図れたか、めあてが達成できたかを確認した。その結果、ほとんどの児童がコミュニケーションを図ることができたと答えていた。また友だちの良いところ、がんばっていたところを見つけて発表する機会をもち、それを学級で共有したことで、児童は自己肯定感を高めることができた。
- 各学年とも、昨年度までの実践を基にした言語材料を入れ、児童の実態に応じた内容を付け加えて、年間指導計画を立て指導することができた。また外国語活動だけでなく、国際理解教育も他の教科や総合的な学習と関連づけて指導した。
- 各学年ともワールドルームを活用し、絵カードなどの掲示物や DVD などの視聴覚教材を使い、児童が興味をもって楽しく外国語活動に取り組めるよう指導した。
- 研究討議会では、ワークショップ型の協議が定着し、活発に意見交流をし、討議を深めることができた。
- 外国の方をゲストティーチャーと呼び、その国の文化や遊びなどを知る機会を作り、その国と日本と文化や習慣の違いに気づき、もっと知りたいと思ったことを児童自らが調べて、その成果を他の学年に向けて発表することができた。そのため学校全体で、異文化に興味・関心が高まった。
- 他国の様々な文化や習慣にある「ちがいは」を多様性としてとらえるために、「ちがいは」に気づき、理解するための話し合いを深めたので、その「ちがいは」を理解し、認め合うことの大切さに気付くことができた。

（２）今後の課題

- 「ワールドルーム」を定期的に整備・整理し、校内や教室で継続的に英語に親しむことができるようにする。
- 今後も他の教科（生活・社会・総合など）と関連づけて、国際理解教育（外国語活動）の年間指導計画や指導案を活用して継続的に指導に取り組み、さらに全学年がモジュール授業を取り入れるよう計画を立てる。
- C-NETの活用や地域のゲストティーチャーの方について、来年度以降も検討し体験的な学習を多く取り入れられるようにする。
- クラスルームイングリッシュを今後も継続的に取り入れたり、学校行事の中で、児童が英語に親しめるよう工夫していく。